

# 服装に表われた手芸的装飾について (第2報)

——西洋服飾文化史より——

汐田 美智子 ト部 澄子

## Study of Hand-worked Pattern of costume (Part 2)

by Michiko Shiota and Sumiko Urabe

It is our intention to study hand-worked pattern of costume as this has been known since ancient times up to the present, in the hope that new ideas from this study may be applied to the modern fashions.

We therefore studied the development of such design as it occurs in western women's costume throughout the centuries.

In our previous report (Part 1) we tried to summarize the hand-worked pattern in the following areas: (1) Egypt and Western Asia, (2) Ancient Greece and Rome, (3) Early Christian Age and Byzantine.

In the present report we will investigate the development of design in the following periods: (4) Early part of the Middle Ages, (5) The latter period of the Middle Ages. In Part Three of this report we wish to carry out our studies further to cover the Sixteenth Century and thereafter.

### 序 言

本研究紀要第7集第1報において、研究目的ならびにエジプトからビザンチンにおける服装に手芸的装飾がどのように扱われてきたかの概略を考察、報告したが、これに引続き第2報として中世前期、中世後期の各時代について考察したい。本研究で述べる手芸的装飾の概念規定としては、布などに施す純粋な手芸、手芸に用いられる模様、図柄、色彩（染織物）などなんらかの形で服装を装飾的に変化させるものを含めた広範のものをいう。考察方法として資料を収集し、その中からより手芸的なものを探求抜萃した。

### 本 論

#### 1. 中世前期（西暦約800年から1200年まで<sup>1)</sup>）

西洋中世は一般に5世紀の後半から15世紀の終りをいうが<sup>2)</sup>、本研究では文化史のうえで区分される<sup>3)</sup>中世前期はロマネスク (Romanesque) 様式時代、中世後期はゴシック (Gothic) 様式時代の文化を中心として研究の対象とした。

##### (1) 中世前期の社会的背景

中世の特徴として荘園組織と都市経済の発生、発達があげられる。荘園組織の発生により王侯、騎士、教会等の領主と農民の間に富の集中と偏在がはなはだしかった。また中世の都市はギルド都市ともいわれているが11世紀あるいは14世紀に紡車や晒布の装置が発明されたといわれ、これはギ

ルド組織の圧力でその実用化は後であった。ギルド組織の中で服飾に関する仕事としては、縁飾りつけ、衣服の裁断、仕立て、毛皮類の仕立て、バックルやブローチなどの金属細工、染色業、毛皮のなめし業、靴作り、手袋作り等に分れ、それぞれで技術を競ったといわれている<sup>4)</sup>。また、11世紀後半から14世紀の末に至り、シャンパーニュに新しくおこってきたメッセ (Messe) 一歳市がひらかれ、その地方の特産物の交換<sup>5)</sup>が行われ、ギルド組織と共に服飾の発達に影響をおよぼしたと思われる。

一方、文化形態についてみると、11世紀、12世紀は封建制度<sup>6)</sup>の充実とともに、貴族の地位は上昇し、中世紀のキリスト教が、厳格な修道院制度を確立し、教会や修道院<sup>7)</sup>を中心として文化が栄えた。中世前期では、独創的な文化を持たなかったのも、ほとんど昔のローマ様式のもの、またビザンチンの古代文化の感化をうけ入れたものでロマネスク様式時代ともいわれている。装飾の目的が生活を離れて、宗教を中心に発展したのもこの時代の特色である。

## (2) 中世前期の服装と手芸的装飾との関係

中世前期の服装の概観としては、北方は気候上、保温を考慮し、身体を包みながら、身体 of 自然な形を素直に現わし、単純なものが多い。[図1]は12世紀から13世紀頃のイギリス人の変ったそでの服装で、そでに余分な布を使用し、えりぐりとそで口を刺繍で飾っていた。また他にそで付の近くをスモッキング (Smocking) の技法で縮めているものもみられる。また胴のシルエットが自然になるように背中にあみしめられるように鳩目が沢山あけられ、表着の下には手首までの長さのタ



図1 12世紀から13世紀頃のイギリス人の変ったそでの服装  
(English Costume of the Early Middle Ages. London, 1956. Brooke, Iris P. P. 42による。)



図2 12世紀のフランスの上流婦人の新型ブリオー  
(「西洋服飾発達史」古代、中世編 丹野郁著 光生館 昭40 P. 180 図. 115 による。)

イトのそでの下着をつけていた。腰から下と下腕とは装飾的に誇張されて、余分な布を用いシルエット装飾の美を考えていると思われる。布地は一般に装飾的なものが多い。

次に服装の種類とそれに施こされた手芸的装飾について述べると、フランス人の女子の服装でシェーンズ<sup>8)</sup> (Chainse) といわれるものは、これまでの白麻製の下着のことで丈が長く足首に及び、そででは細く、そで口は刺繍され、あるいは美しいバンドでしめられ、またえりもとは、数列の飾りコードや金糸<sup>9)</sup>、銀糸の縫いとりなどで装飾されていた。ブリオー (Bliard) は、9世紀後半から流行したオーヴァーチュニック (Over Tunic) のことで布地は絹などのごく薄地のものであった。[図2]は、12世紀のフランスの上流婦人の新型ブリオーで、肩、胸、背、上腕をステッチで縮

め、えりぐりは金糸、銀糸のコードやモールで縁どりをして飾った。コルサーージュ (Corsage) は、そでなしの密着した胴衣のことで適当の厚味と張りとを必要とした為、布を2、3枚重ねてステッチし、このステッチの方法や装飾によって変化をつけた。金糸、銀糸、色糸などで菱形その他さまざまな形にステッチされ、宝石がステッチの交わりや合間につけられたものもあった。またコルサーージュの上からウエストやヒップにベルトをしめるのが一般の風習であったので、女子は金銭や鍵などを入れる[図3]のようなオーモニエール (Aumonière) という袋を下げていた。これは装飾と

実用をかねたものであった。このベルトには絹、毛、麻、革などが、宝石や、金属で飾られていて端は長くたらしして飾りとした。

イギリス人、ドイツ人、イタリア人の服装もフランス人と大差はなかったと思われる。

### (3) 中世前期の手芸的装飾の特徴

前述のように装飾の目的は、封建社会における装飾が、上流階級の富める人々の間に主に用いられ、宗教中心であり、これらの中心となったのが教会であった。教会が技術学校として栄え、織物、刺繍などの指導を行い、今日、われわれが用いているフランス刺繍の基礎ぬい〔チェーン・ステッチ (Chain Stitch), サティン・ステッチ (Satin Stitch), タペストリー・ステッチ (Tapestry Stitch), ランニング・ステッチ (Running Stitch) 等〕は主としてこのころから尼僧によって考案されたという説もある<sup>10)</sup>。服装に用いられた装飾の主なものには色糸、刺繍、スモッキング、金糸、銀糸によるコードやモールの縁どり、宝石で飾ったり、オーモニエールやベルトを用いたりした。またえり、そで口及びすそ廻しにリボンやビロード、毛皮や紗のような色変りの縁飾りも装った。13世紀には裁断法の進歩と服装そのものが質素、単純になってきたので、クラビス (Clavus) が再び現われてきた。また12世紀になって手袋も現われた。中世紀になって組紐、種々の繊維、材料などを使った編みもの、ダーンド・ネッティング (Darned Netting), ドロン・ワーク (Drawn work), カット・ワーク (Cut work) などが現われ<sup>11)</sup>装飾をより豊かなものにした。

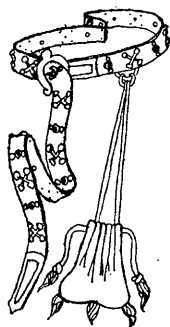


図3 オーモニエール  
(Medieval Costume  
in England and  
France. London,  
1950. Houston, M.G.  
P. 54 Fig. 103による。)

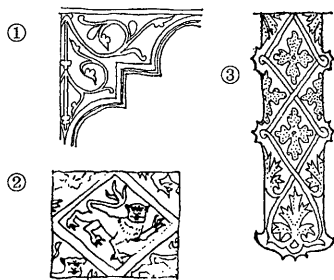


図4 刺繍に用いられた模様  
(Medieval Costume in England  
and France. London, 1950.  
Houston, M. G.  
①P. 70 Fig. 121  
②P. 54 Fig. 107  
③P. 28 Fig. 38 による。)



図5 ロマネスク模様  
(デザイン・ハンドブック  
(宮下孝雄編 朝倉書店 昭35)  
P. 68 第II. 17図による。)

さらに、東方からもたらされた絹により織物装飾にも変化がおこり絹糸は刺繍にとって新しい材料で、色彩豊かに染められ、布地に刺され、その上さらに金糸、銀糸や宝石もまじえて豪華な装飾模様がつくられはじめた。また富豪たちは、教会の調度品や僧衣<sup>12)</sup>を刺繍や綴れ織の技法で飾って奉納し、9世紀には聖書を刺繍で飾ったブックカバーで覆ってもち歩くことが流行した。このように服装以外のところまでも進出した。

〔図4〕は刺繍に用いられた模様で①は13世紀のミサの礼服に施されていたものでブルーの絹の紋織物に金糸と色絹糸で刺繍され、②はくつの刺繍の模様、③は13世紀のダルマチカに施こされていたクラビスの模様である。〔図5〕はロマネスク模様である。ロマネスク模様は唐草模様の中でも結び模様が最も多い。ほとんどすべてが彫刻的な装飾にみられるが、一般に力強い表現であるが、一般的に粗放で、ローマ模様のような洗練されたところはない。

### 2. 中世後期(西歴約1200年から1480年まで)

前期の項で、中世の概観にもふれたが、後期においては、中世的なものが充実後、徐々に解体して近代的なものに移っていった。

#### (1) 中世後期の社会的背景

1096年から数回にわたる十字軍の遠征は、本来の目的は達せられなかった<sup>13)</sup>と同時に、数多くの封建貴族、騎士を戦歿、破産させたので、封建制度の崩壊につれて封建貴族の勢力が衰え、商人階級が抬頭してきた。一方、地中海を中心とする東西の商業や東ローマとの文化の交流が始まり、それまで地方市場のために生産していた手工業は技術の進歩や、機械の発明と仕事と分業による生産の能率化、東方諸国などの交易の繁栄などによって13世紀から14世紀頃には家内工業がさかんに行われた<sup>14)</sup>。14世紀以後は産業が発展し、織物業が一段と進歩し、中でも毛織物業が大規模になり、生産量の増大と消費層が拡大したために、服飾の発達に大いに影響があった。

文化についてみると、ゴシック様式は12世紀の中頃から北フランスを中心として現われ、北はイギリスから南はイタリア、スペイン一帯まで普及した。その構成は複雑であったが理性的であったといわれ、前にもふれたが尼僧が教育にたずさわったので、善悪の教訓は教会堂内のステンド・グラス（ガラス絵）<sup>15)</sup>、壁画、タペストリー<sup>16)</sup>などによって示されたため、これらの芸術は、ゴシック建築の重要な装飾として発達した。

#### (2) 中世後期の服装と手芸的装飾との関係

服装の概観として、服装は13世紀に入ると地味になり、ローマやビザンチンの模倣から創作へと脱皮した。そして裁断が巧みになり、再び奢侈的な服装も現われ出した。

服装の種類とそれに施こされた手芸的装飾は、フランスの上流の人々は、身体にぴったり合う服装で、そではタイトになり質素であったが、その上に着るそでのない飾衣シクラス（Cyclas）が現われた。またシクラスと同系のものに外奢のようなものがあるが、そでは単なる飾りそで、そで付けの近くをスモッキングの技法で縮めているものもあった。また前面をボタンがけにするものもあり、中、下流の婦人たちは、単純で粗末であったが創意にみちた装飾のものをうい、一般にえり

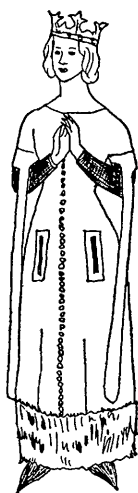


図 6 14世紀のイギリス婦人の  
コタルディー  
(A Pictorial History of Cos-  
tume. London, 1955. Tilke,  
Max. P. P37 Fig.9 による。)



図 7 14世紀のフランスの貴婦  
人のサイドレスガウン  
(「西洋服飾発達史」古代、中  
世編 丹野郁著、光生館  
昭和40 P.206 図134による。)



図 8 14世紀のフランス婦人が胸  
当てをした姿  
(A Pictorial History of Cos-  
tume. London, 1955. Tilke,  
Max. P. P44 Fig.11 による。)

に刺繍を施して飾りとしていた。

14世紀から15世紀までの服装には、コタルディ（Cottardie）とよばれたぴったりした服装、飾り表着のサイドレスガウン（Sidless Gown）、胸当、染分けの服<sup>17)</sup>、紋章の服、12世紀に流行したような大そでのガウンなどが見られる。14世紀の服装は、ぴったりとしたもので肩、胸や背を出す型が多く用いられ、ゴシックの理想はすらりと長いものを好んだのでスカートはさらに長くなり、ひきずそになった。

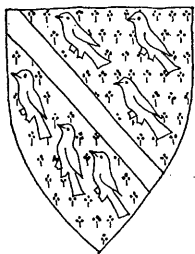
〔図6〕は、14世紀のイギリス婦人のコタルディーである。この図では前をボタンがけにして一つの飾りとしているが、ボタンのかわりに後で紐じめにもすることもあった。ひじの上からティペット（Tippet）と称される白い飾り布<sup>18)</sup>をつけ動きに対して美しさを発揮した。下腕は下着のそでで包んであり中世の服装では腕を見せることはなかった。〔図7〕は、14世紀のフランスの貴婦人のサイドレスガウンである。図のように、コタルディーの上にさらにサイドレスガウンを用いた。えりぐりとそでぐりを大きくあけ、毛皮を縁飾りにし、腰に金銀の板を宝石などで飾った装飾用のベルトを装っていた。サイドレスガウンの色は一般に鮮やかな単色のものであったが、裏地にはかわった色を用いて表裏の色彩と、さらにコタルディーとサイドレスガウンの二つの服装の色彩もたのしんだ。〔図8〕は、14世紀のフランス婦人が胸当てをした姿である。この胸当ては毛皮で出来ており、中央には、宝石入りのボタンで飾られていた。

一方、中世において貴族階級の世襲がはじまったので、服装においても身分関係がうるさく<sup>19)</sup>、上流階級と下層階級の人々の服装の差が大きくなってきた。このように14世紀には身分を重じ、家柄を尊ぶ封建的な風習が著しくなったので、紋章を服装につけることが流行した。

ここで紋章<sup>20)</sup>について述べると、紋章は刺繍、アップリケや染出しで行い、紋章は目印として目立つ事が必要のために、最初は画一的な楕型に現わされていたが、これが普及するにしたがって、単純な棒や円のような幾何学的な図形、月や星のような天体、魚や獣のような動物、植物、職業などを示したものなどが用いられ、複雑化されていったが、それらをはっきりと見せるために極めて



普通紋



紋章

図9 普通紋の一部と紋章  
紋章 Medieval Costume in England and France. London, 1950. Houston, M. G. P. P 136 Fig. 250  
普通紋「サインとシンボル」瀬木慎一著 美術出版社 1964. P. P99による。



図10 14世紀のフランスの皇族の紋章のついたコタルディー  
紋章 Medieval Costume in England and France. London, 1950. Houston, M. G. P. P 108 IV による。

単純な線と鮮やかな色で描いた。〔図9〕は普通紋の一部と紋章である。以上のような紋章が服装に用いられたので、服装が色彩的ではなやかなものであったので若い婦人や老人、貴族や平民男女をとわず流行した。〔図10〕は、14世紀のフランスの皇族の紋章のついたコタルディーである。服装の左右、上下色彩が異なり色彩が豊かで、また模様も服装全体におかれ奇抜な感じを与えている。

15世紀の服装になると、ウエストが高く、スカートが長くなって一層、華かで装飾的



図11 15世紀のドイツ人の鈴のついた服  
(The Mode in Costume N. Y., 1958. Wilcox, R. Turner. P. P 65)による。



図12 15世紀のフランス婦人のコタルディー  
(A Pictorial History of Costume. London, 1955 Tilke, Max. P. P 50 Fig. 16 による。)



図13 15世紀のイギリス婦人の大そでのガウン  
(A Pictorial History of Costume. London, 1955 Tilke, Max. P. P 37 Fig. 16 による。)

になった。また布地も装飾的になり毛皮もたくさん用いられた。その他、飾りとしては、ティベットやベルトのほかに、15世紀の中頃になると〔図11〕のように服装に鈴を縫いつけたもの、服装の縁に木の葉などを形どった切込み模様をつけたものなど、装飾を必要以上につけた服装が流行した。

〔図12〕は、15世紀のフランス婦人のコタルディーである。そではタイトであるが、スカートにたっぷり布を用いてひきずそになっているので量感があり、布地は主に綿織絹やビロードを用いた。えりもとは金糸銀糸のえり飾りやネックレスで飾り、ウエストは装飾的な幅広いベルトをしめ、えりとカフスに毛皮やビロードを用いた。この図では、すそに刺繍が施こされているが、毛皮のものもあった。〔図13〕は15世紀のイギリス婦人の大そでのガウンである。これをフープランド(Houpeland)と称した。フープランドは男女共に着用され、布地はサテンや錦などの派手で華麗な柄のもの<sup>21)</sup>が好まれ、また表裏の布地の色彩もたのしんだ。またベルトを高くしめ、一つの飾りとした。

### (3) 中世後期の手芸的装飾の特徴

ゴシック様式の影響、産業や交易の発達により布地などが量的、質的にも豊かになったので装飾の上に影響が大であった。また封建制度の充実とともに身分関係が服装にまで及び、前述のように紋章が服装に用いられるようになったし、色糸、金糸、銀糸の刺繍やスモッキングなどの技法のほかにレース編も生産されるようになった。また、色彩が豊かになり、服の上下、左右を染分け、表裏の布地の色をかえたりした。中世紀にボタンが多く用いられようになり、とめ具の他に材料に宝石などを用いて飾りにもなった。腕にたらししたティベットや装飾的なベルトを用いたこと、毛皮やビロードの縁飾りや15世紀の鈴をつけたり木の葉などを形どった縁を服装に施したことなどが目立つものである。布地はタフタ、ビロード、サテン等が高級服地として用いられたが、今まで絹は絹織物として輸入されていて画一的であったが、東洋から生糸がそのまま持ち込まれるようになり、これがギルドの専門の職人によって加工され模様や色に変化がつけられ、さまざまな種類のものが生産されるようになった。ビロードも、芸術家の協力、技術の進歩により今まで単色のものが多かったが、金糸が織り込まれたビロード錦、2色以上を用いた模様織、毛足に長短をつけて光沢

の美しさを出したものの、刺繍されたものなどのように種類が非常にふえ、その上、豪華になっていた。

また毛皮<sup>22)</sup>が裏地や外套、服装の縁飾り、ケープ等に用いることが流行し、装飾的な目的の他に寒さから身を守るために実用もかねた。使用法は、細く裁たれて、縁飾りにされたほか、種類と色も異なる毛皮が装飾的に接ぎ合わされるというこったものまで現われた。これらの毛皮類はほとんど染色して用いられていたといわれる。

〔図14〕は、ゴシックの模様である。ゴシックの模様はよく統一され、その表現力は力強い、アカンサスは様式化から写実化へかたむき、葉片は先が丸くなるか、あるいは巻きかえった唐草模様になっている。その他、四つ葉、うまごやし、葡萄の葉などが使われている。動物はキリスト教の象徴的記号のものが盛んに用いられ、幾何学的表現のものに華文形模様がステンド・グラス装飾として、また渦線模様やモザイク模様などもある。図柄も豊かになり、野草、虫、鳥などを配したものが多い。アカンサスは唐草風のものになっている。動物はビザンチンやロマネスクのものであるが、紋章として、わしや獅子などが用いられた。

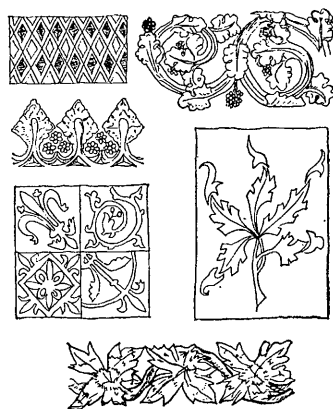


図14 ゴシックの模様  
 The Mode in Costume. N. Y.,  
 1958. Wilcox, R. Turner.  
 P. P51「デザインハンドブック」  
 宮下孝雄編 朝倉書店 昭35  
 P. 68 第Ⅱ. 18図による。

## 結 論

第1報において、古代エジプトやギリシヤ、ローマにおける手芸的装飾は、刺繍、染色、織文、金糸などの縁飾り、クラビス、房飾りやドレープ、飾り紐(または飾り帯)、リボンの蝶結びや装身具が施こされていた。またビザンチンでは、クラビスがボーダーにかわり、絹、紋織物が発達し、真珠や宝石がたくさん施こされ、また、毛皮を服装の縁飾りや裏地に用いられて、贅沢な時代であったことを考察した。中世は封建制度の中で、キリスト教を中心にして、ロマネスク、ゴシック様式が発展し、全階層的でない文化であった。中世前期では、前述の他に、飾りコード、モール、リボン、ビロード、毛皮、紗などで縁どりしたり、スモッキング、組紐、編みもの、ダーンド・ネットティング、ドロンワーク、カット・ワークなどが用いられ、クラビスも再び用いられ出し、オーモニエールや装飾的なベルトも多くみられる。

中世後期は、十字軍の遠征により、封建貴族の勢力が衰え、商人階級が抬頭したし、機械の発明・生産の能率化などにより、毛織物の生産が大になり、服装に量感が出され、装飾もティペットや鈴などをつけて動的で立体的なものがあらわれた。この他、染分けの服、または紋章をつけたり、レース編も生産されるようになった。また縁に木の葉などを形どった切込み模様をつけたものなども出現した。

以上を通じて考察出来たことは、装飾が高貴な人々の間により大であり、気候の差異により、エジプトのように暑いところでは肌を出す為に装身具が効果的であり、ビザンチン、ロマネスク、ゴシックの時代にはキリスト教の影響が大であったこと、また生産の増大により服装の形態がかわっていった。また刺繍はどの時代にもどの階級にも用いられている。これは、服装の飾りとして色糸などを用いることにより、色彩などがより一層、効果的になり、手がるに出来ることなどによるも

のと思われる。また中世は、ローマのものより、ビザンチンの装飾様式が加えられたもので、ことに上流階級にその傾向が強い。

末尾ではあるが、本研究にあたり多大な御指導、御助言、また本稿の御校閲を賜った、本学服飾美術学科長宮下孝雄教授、また埼玉大学秦玄龍教授、本学斎藤茂教授、本学附属高校高橋始教諭、ならびに研究室の諸先生方に深く感謝の意を表し、併せて今後の御指導をお願い申し上げる次第である。（なお、本稿は、昭和40年11月26日、昭和41年11月26日、東京都私立短期大学協会第1回、第2回家政学研究発表会で発表したものの一部を含む。）

- 註 1) 「服装の歴史」ヘニー・ハラルド・ハンセン著 原口理恵・近藤等共訳 座右宝刊行会 昭37 P.30 P.34
- 2) 「図説世界文化史大系 ヨーロッパ中世」角川書店 昭34 P.23 「歴史学通説」明治大学史学研究室 昭33 P.111 「歴史をみる眼」堀米庸三 日本放送出版協会 昭39 P.74などによる。
- 3) 「世界美術全集 西洋中世Ⅱ」平凡社 昭31 P.23 P.55 「西洋美術史」大沢武雄著 造形芸術研究会 昭36 P.106 P.119~133 「世界史ハンドブック」鈴木俊・井上幸治編 朝倉書店 昭40 P.196などによる。
- 4) 「西洋服飾発達史 古代・中世編」丹野郁著 光生館 昭40 P.175
- 5) 南フランスとイタリアの商人は、東方諸国の産物、フランドルとブラバントの商人は毛織物、ドイツの商人は亜麻布など。「一般ヨーロッパ経済史」秦玄龍著 法政大学出版局 1966 P.107~108
- 6) 「世界史大系 第5巻 ヨーロッパ中世」誠文堂新光社 昭33 P.86~112などによる。
- 7) サン・ミシェル・ド・クシャ修道院は東ピレネーの山中にあってベネディクト派修道士が住んで、11世紀には、西欧文化の重要な拠点となっていた。
- 8) 4) と同書 P.180による。
- 9) 「レースの歴史とデザイン」日本繊維意匠センター 昭37 P.8 4)などによる。
- 10) 4)と同書 P.176による。
- 11) 9)と同書 P.3
- 12) 僧衣に装飾を施したのは、中世において権威をもっていたからである。
- 13) 十字軍の遠征は回教徒の支配下にあったキリスト教の聖地エルサレムを、キリスト教徒の支配下にとりもどすことと、王侯たちの経済的期待もあった。6)と同書 P.186~193などによる。
- 14) 例えば、ドイツでは、ウルムやレーゲンスブルグの毛織物工業、コンスタンツのリンネル織業、ケルンの絹織業などがあげられる。
- 15) ゴシックとともに起こった。シャルトル教会堂、聖シャペル寺、聖エリザベート寺などにみられる。
- 16) タペストリーは防寒防湿と装飾を兼ねて13世紀~15世紀に修道院の工房でつくられた。2)「図説世界文化史大系」P.281 図667~669. P.283 図670
- 17) 男女の別なく、色の異なった服を重ねて着るだけでは満足しないで、服装にたて線によって色を分け、身体の左右、両側は異なった色のものを用いて変化させた。
- 18) ティベットは、ラシャ、錦織、絹、麻、毛皮などで作り、色は白が一般的であったが、English Costume of the Later Middle Ages. London, 1956. Brook, Iris. P.28 には、白ではなく、えりぐり、すそなどと同じ模様のものがみられる。
- 19) 6)と同書 P.187には中世の諸身分によって服装のことがわかるし、「図説西洋人の歴史、生活と文化」前川貞次郎編 創元社 1954の、P.43~48の図には荘園の生活、P.50~53の図には都市の生活、P.54~55の図には諸侯の生活、P.63には宗教の生活というように分けて画かれている。
- 20) 「サインとシンボル 絵ことばの世界」瀬木慎一著 美術出版社 1964 P.99 「装飾のハンドブック」フランツ・S・マイヤー著 毛利登編訳 東京美術 昭41 P.451~462



汐田・卜部 服装に表われた手芸的装飾について（第2報）

21) 血紅色の地に金糸の模様が織られたものや房飾りがそで口につけられたものがみられる。

22) 上流階級には、リス、アナグマなど、一般には羊・狼・猫などが用いられていた。

以上の他に「衣生活」No.43 衣生活研究会 昭36 P.9~11, No.50 昭37 P.9~14, No.62 昭37 P.26~29,「欧洲服装史」高橋イネ・加藤とし共著 培風館 昭11 P.68~101,「社会史的思想史」三木清・林達夫・羽仁五郎・本多謙三著 岩波書店 昭37 P.71~153,「女性服装史」今和次郎著,相模書房 1965 P.83~124,「西洋衣服の変遷」青木良吉著 大日本文化研究会 昭15 P.73~86,「西洋被服文化史」元井能著 光生館 昭34 P.34~48,「西洋服装史入門」飯塚信雄著 理想社 昭30 P.69~83 その他を参考にした。